

C  
A  
S

# News Letter

Center for Asian Studies, Kanagawa University

神奈川大学アジア研究センター

No.13 July, 2020



## Contents

《個別奨励研究報告》	
「先住民政治をめぐる沖縄での現地調査」 知花 愛実	1
《研究会報告》	
「中国におけるネット通信販売の発展要因」 孔 令建	3
《国際シンポジウム報告》	
神奈川大学アジア研究センター主催「アジア知識基盤経済移行研究」報告 平川 均	4
2019年度活動報告	6

### 個別奨励研究報告

## 先住民政治をめぐる沖縄での現地調査

知花 愛実

本報告は、2019年度アジア研究センター個別奨励研究の採択を受け、2020年1月22日から27日にかけて、沖縄で実施したフィールド調査についてである。私自身の個人研究課題は「Indigenous and Diaspora: 沖縄の“土着性”概念からみるトランスナショナリズム」である。博士課程での沖縄の先住民政治研究の延長としてこのテーマの研究を続けている。

2007年の国連総会で先住民の権利に関する宣言が採択されてから10年以上が経過した。日本では、「アイヌは先住民」との政府の認識の下、アイヌの伝統文化や生活の場の再生のための支援、自然資源に関する特例措置、観光振興等の施策が検討、推進されている。一方、アイヌと同様に「先住民」としての権利を主張する沖縄では、「先住民」や「琉球民族」の定義が曖昧であることから、さまざまな葛藤や議論、摩擦が生じている。

私の研究の目的は、沖縄においてIndigeneity(土着性)の概念を用いた政治主体性の自己認識が広まりつつあることを踏まえ、その意識形成と背景にある歴史認識や政治・社会問題、そしてIndigeneity(土着性)論の可能性について検討することである。研究は、文献調査とフィールドでの参与観察、およびインタビューを中心に進めている。

今年1月に現地調査のために訪れた沖縄では、琉球大学、Koza X ミクストピア研究室、みんなのいえ、首里城、

campoo、こみゅとば等を訪問し、関係者からの聞き取りおよび意見交換を行った。一見すると研究課題とは関係のない訪問のように見えるが、前述のように関連研究の延長線上にあり、先住民政治的観点から沖縄を包括的に研究する上で有意義な調査であった。聞き取りでは、沖縄の歴史的、政治的、社会的、文化的解釈や沖縄が直面しているさまざまな問題の理想的な解決策についてそれぞれの意見を聞いた。また、先住民政治(Indigenous Politics)との関わり方についても意見交換を行い、今後の研究・分析に非常に貴重なものとなった。

訪問先の一つに、出張計画当初は予定していなかった首里城がある。2019年10月31日、沖縄県那覇市にある首里城で火災が発生し、正殿が全焼した。14世紀に建てられた首里城は、長い間「琉球王朝」の象徴として存在を主張してきた。かつて、首里城は沖縄戦で米軍の砲撃の標的になり廃墟となったが、正殿や門



KozaX ミクストピア研究室外観



火災前の首里城正殿 「出典：Wikimedia Commons」



火災後の首里城北殿近辺

は戦後に復元された。1972年に沖縄が日本に返還された後、首里城公園として再建・整備され、首里城正殿は戦後の沖縄復興のシンボルとしてとしてその威厳を謳った。2000年には「琉球王国の城及び関連遺産群」として世界遺産リストに登録された。「琉球王国」の歴史を無関係のものにすることができない沖縄の人びとにとっては衝撃的な火災だった。悲しいニュースのすぐ後に、有志による募金調達とクラウドファンディングのキャンペーンが始まった。この動きは沖縄県内や日本国内だけでなく、世界各地で悲嘆や復興を求める声、支援の申し出がある。琉球王朝という過去の遺産である首里城の再建を、誰がどのように進めていくかという議論が沖縄各地で繰り広げられている。

次に、Koza X ミクストピア研究室では、代表のDr. Ikehara に会い、話を聞いた。沖縄市コザの歴史や、戦後の米軍基地に隣接し黒人街と呼ばれた場所の記録と人びとの記憶などが語られた。戦後、米軍の支配下にある沖縄では、さまざまな人びとが国境を越えて町に集まっていたことを知った。当時のコザを生き残った人びとの歴史を記録するそのプロジェクトについて学んだことは、沖縄の Indigeneity (土着性) とトランスナショナリズムをより批判的に考え、分析する刺激にもなった。

またアジア研究センターの共同研究で共に活動している客員研究員の八尾先生の紹介により、Campoo とこみゆとばの代表者と再会した。八尾先生が以前、ボランティア論の授業を担当していたとき、授業に参加した2名のゲスト講師に話を聞いた。地域の防災やまちづくりのあり方を考え、発信する取り組みを行っている彼らは、首里城再建への市民アクションにも携わっている。これらの活動を通して「地域」「場」「ひと」「公共」「これからの沖縄」を議論する若い代表者らと交流することが出来た。

さらに、みんなのいえでは、“先住の”沖縄人ではない代表者と沖縄人が協働で観光、福祉、教育、国際交流などの多岐に渡るプログラムや居場所づくりに取り組んでいる様子について話を聞いた。このプロジェクトは、国籍、文化、宗教、政治的立場など多様なバックグラウンドを持つ人びとが、沖縄の暮らしを体験・共有することで互いに学び合う機会を提供することを目的としている。先住民の自己決定に基づいてしばしば議論される伝統文化や、土地、観光について意見交換を行うことができた。

最後に、本現地調査では、沖縄のまちづくりや市民活動の先駆的な取組に携わる方々との意見交換を行った。聞き取りを行った訪問先の取り組みには、いくつかの共通点があった。それぞれのプロジェクトの中で、必ずしも“土着性”あるいは“先住性”という用語が常に使用されているわけではなかった。しかし、先住民政治でよく議論される土地、場所、ひと、自己決定というテーマは一貫して共有されているようである。今回のフィールド調査の成果を踏まえ、今後は文献調査を加えて本研究課題を進めていく。

(所員 神奈川大学経営学部 助教)



首里城復興に寄せられた寄せ書き